企業分析レポート

～明治ホールディングス株式会社　と　雪印メグミルク株式会社～

学　　年：

学　　部：

学　　科：

学籍番号：

氏名：

1　企業の概要

今回私は、自分にとって最も興味のある食品会社の「明治ホールディングス株式会社」と「雪印メグミルク株式会社」の乳業大手２社を選び、有価証券報告書を用いて、企業分析かつ経営比較を行なった。

両社の概要

明治ホールディングス株式会社（Meiji Holdings Co.,Ltd.）

- ✓ 本社：〒104-0031　東京都中央区京橋 2 丁目 4 番 16 号
- ✓ 設立：2009 年 4 月 1 日

1916 年、明治製菓の前身、東京菓子株式会社を設立。キャラメル・ビスケットなどの製造を始め、明治牛乳や明治バター、日本初のプレーンヨーグルトの発売で大きな売上を達成した。2009 年には、共同持株会社「明治ホールディングス株式会社」を設立し、明治製菓・明治乳業が経営統合を行なった。2011 年には明治グループ内事業再編により、食品事業会社「株式会社明治」、薬品事業会社「Meiji Seika ファルマ株式会社」を発足し、ジェネリック医薬品アルツハイマー型認知症治療剤「ドネペジル明治」を発売。こうしてジェネリック医薬品が大きく成長し、明治ホールディングスに大きな利益貢献をもたらした。また、2016 年には、明治グループ創業 100 周年を迎えた。

「明日をもっとおいしく」をスローガンに、おいしさ・楽しさ・健康・安心の世界の中で、お客様一人ひとりの、健やかな日々の生活に貢献するという経営ビジョンのもと、「食と健康」のプロフェッショナルとして、常に一歩先を行く価値を作り続けている。

雪印メグミルク株式会社（MEGMILK SNOW BRAND Co.,Ltd.）

- ✓ 本社：〒160-0003　東京都新宿区本塩町 13 番地
- ✓ 設立：2009 年 10 月 1 日

雪印メグミルク株式会社は 2009 年に雪印乳業と日本ミルクコミュニティが経営統合し、共同持株会社として誕生した。その後 2011 年に雪印メグミルクが雪印乳業および日本ミルクコミュニティを合併吸収し、現在の雪印メグミルク株式会社に至る。

「未来は、ミルクの中にある。」というスローガンのもと、安全で安心できる商品・サービスを提供するとしている。また、「消費者重視経営の実践」「酪農生産への貢献」「乳(ミルク)にこだわる」という 3 つの使命を果たし、ミルクの新しい価値を創造することにより、社会に貢献する企業であり続けることを目標としている。

余談だが、私はチーズが大好きでほとんど毎日チーズを食べている。そんなチーズ好きの私が今回の企業分析で、なんと、雪印メグミルクは日本で初めてチーズの大規模製造を始めたことを知った。雪印メグミルクのチーズ製造販売は 1933 年から始まり、以来ずっと変わらずに、私たち日本人の嗜好に合うプロセスチーズづくりを目指している。

２　要約財務諸表及び財務分析表

ここから明治ホールディングスと雪印メグミルクの企業分析を行なうため、２社の財務諸表について記していく。今回の財務分析で使用するデータは 2010 年から 2015 年までの過去５年分の有価証券報告書である。

２．１　明治ホールディングス株式会社

明治ホールディングス株式会社

連結貸借対照表　　［単位：百万円］

連結貸借対照表	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
資産合計	716,368	749,985	785,514	779,461	877,367
流動資産	301,676	322,531	341,211	329,071	352,018
固定資産	414,692	427,453	444,302	450,390	525,349
繰延資産	0	0	0	0	0
負債合計	422,838	451,494	464,904	451,339	497,065
流動負債	301,333	352,500	309,764	261,466	298,575
短期借入金	87,989	61,860	42,108	43,754	49,590
1年内返済社債・長期借入金	0	40,000	15,000	0	0
固定負債	121,504	98,994	155,139	189,872	198,489
社債	55,000	50,000	85,000	100,000	65,000
長期借入金	28,821	6,401	23,285	34,630	68,889
純資産合計	293,530	298,491	320,609	328,121	380,302
資本金	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000
資本剰余金	98,852	98,852	98,851	98,852	98,853
利益剰余金	172,128	174,494	185,436	198,957	223,166
自己株式(減算)	-9,225	-9,268	-9,299	-9,451	-9,577
株主資本合計	291,724	294,078	304,989	318,358	342,442
その他の包括利益累計額合計(評価・換算差額等)	-3,942	-2,488	8,394	2,089	27,898
自己資本合計	306,263	310,126	331,980	339,349	389,494
新株予約権	0	0	0	0	0
少数株主持分(非支配株主持分)	5,748	6,901	7,226	7,674	9,961
負債・純資産合計	716,368	749,985	785,514	779,461	877,367

表１

明治ホールディングス株式会社

連結損益計算書

［単位：百万円］

連結損益計算書	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
売上高	1,109,275	1,126,520	1,148,076	1,161,152	1,223,746
売上原価	738,500	743,835	754,013	757,766	778,184
売上総利益	370,774	382,684	394,062	403,386	445,561
販売費及び一般管理費	350,584	356,825	375,565	351,842	367,780
営業利益	20,189	25,859	36,496	51,543	77,781
営業外収益	7,078	7,831	7,103	7,019	7,157
営業外費用	5,386	4,559	4,511	4,980	3,112
経常利益	21,882	29,131	39,089	53,582	81,826
特別利益	685	2,540	1,589	2,821	20,454
特別損失	7,978	6,457	6,991	7,747	7,069
税金等調整前当期純利益	14,588	25,214	33,687	48,657	95,210
法人税等合計	7,537	8,367	14,694	17,184	31,606
少数株主損益調整前当期純利益 (当期純利益2015年3月以降)	7,051	16,847	18,992	31,473	63,604
少数株主利益 (非支配株主に帰属する 当期純利益　2015年3月以降)	245	200	-67	582	1,023
当期純利益 (親会社株主に帰属する 当期純利益　2015年3月以降)	6,805	16,646	19,060	30,891	62,580

表 2

明治ホールディングス株式会社

連結キャッシュ・フロー計算書

［単位：百万円］

連結キャッシュ･フロー計算書	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
営業活動によるCF	30,597	50,622	63,847	86,487	105,155
投資活動によるCF	-44,314	-39,504	-47,293	-92,822	-9,809
フリーキャッシュフロー	-13,717	11,118	16,554	-6,335	95,346
財務活動によるCF	4,861	-9,411	-18,194	6,846	-85,071
現金及び現金同等物の換算差額	-61	334	790	668	-669
現金及び現金同等物の純増加額	-8,916	2,041	-850	1,179	9,605
現金及び現金同等物の期首残高	21,741	14,363	16,564	19,238	21,912
現金及び現金同等物の期末残高	14,363	16,564	19,238	21,912	31,516

表 3

明治ホールディングス株式会社
財務分析表

財務分析表	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
収益性分析					
ROE(自己資本純利益率)	2.2%	5.4%	5.7%	9.1%	16.1%
売上高純利益率	0.6%	1.5%	1.7%	2.7%	5.1%
自己資本回転率	3.62	3.63	3.46	3.42	3.14
ROA(総資本事業利益率)	3.0%	3.6%	4.8%	6.8%	9.1%
売上高事業利益率	1.9%	2.4%	3.3%	4.5%	6.6%
総資本回転率	1.55	1.50	1.46	1.49	1.39
売上高販管費率	31.6%	31.7%	32.7%	30.3%	30.1%
売上高営業利益率	1.8%	2.3%	3.2%	4.4%	6.4%
長期運用安定性分析					
固定比率	135.4%	137.8%	133.8%	132.7%	134.9%
固定長期適合率	96.9%	104.5%	91.2%	85.1%	89.3%
長期的支払能力分析					
負債比率	138.1%	145.6%	140.0%	133.0%	127.6%
短期的支払能力分析					
流動比率	100.1%	91.5%	110.2%	125.9%	117.9%
当座比率	55.8%	52.0%	62.2%	69.9%	65.4%

表 4

まずは簡単に表から分かることを読み取っていく。表２を見てみると、明治ホールディングスは着実に売上を上げていっているということが分かる。売上を上げた主な理由は、健康を気にする消費者のニーズに沿った商品開発を行なったことが挙げられる。2011 年に発売された、食物繊維が無理なく摂れる「明治ヘルシーソフトオフスタイル」という、脂肪分を 70%カットし、レタス１個分の食物繊維が含まれている、ヘルシー志向のマーガリンが発売され、2015 年には「明治プロビオヨーグルト PA-3」というプリン体を気にして生活している人をターゲットに、ヨーグルトの新たな健康価値を提案した商品が多くの人の注目を集めた。そして、2011 年 4 月に明治グループ内事業再編により、食品事業株式会社「株式会社　明治」、薬品事業会社「Meiji Seika ファルマ株式会社」が発足され、ジェネリック医薬品が大きく成長した。これらが明治ホールディングスの利益貢献に繋がったと考えられる。

詳しい分析は、「雪印メグミルク」の財務諸表を簡単に見ていき、その後に明治ホールディングスと雪印メグミルクの経営比較として、収益性分析、財務安全性分析、支払能力分析をして、２社を比較していきたいと思う。

２．２　雪印メグミルク株式会社

雪印メグミルク株式会社

連結貸借対照表

［単位：百万円］

連結貸借対照表	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
資産合計	291,838	298,158	313,569	334,775	345,597
流動資産	117,387	131,547	124,651	124,940	132,354
固定資産	174,451	166,611	188,917	209,835	213,242
繰延資産	0	0	0	0	0
負債合計	193,293	190,816	196,884	218,321	223,388
流動負債	105,889	117,813	132,932	128,827	128,320
短期借入金	18,416	17,805	16,532	19,628	21,464
1年内返済社債・長期借入金	6,544	8,712	14,351	10,627	18,483
固定負債	87,404	73,002	63,952	89,494	95,067
社債	0	0	0	0	0
長期借入金	52,610	43,763	37,234	60,563	68,780
純資産合計	98,545	107,342	116,684	116,453	122,209
資本金	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
資本剰余金	17,580	17,580	17,580	17,580	17,580
利益剰余金	47,976	59,124	66,751	67,316	69,194
自己株式(減算)	−4,520	−4,523	−4,528	−4,535	−4,541
株主資本合計	81,037	92,181	99,803	100,362	102,233
その他の包括利益累計額合計(評価・換算差額等)	15,787	13,362	14,875	13,952	17,693
自己資本合計	96,824	105,543	114,678	114,314	119,926
新株予約権					
少数株主持分(非支配株主持分)	1,720	1,798	2,005	2,138	2,282
負債・純資産合計	291,838	298,158	313,569	334,775	345,597

表 5

雪印メグミルク株式会社

連結損益計算書

［単位：百万円］

連結損益計算書	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
売上高	509,413	522,987	544,907	549,816	578,328
売上原価	376,187	389,867	414,568	425,449	444,476
売上総利益	133,225	133,119	130,338	124,367	133,851
販売費及び一般管理費	117,466	118,109	119,096	114,985	119,847
営業利益	15,758	15,009	11,241	9,381	14,004
営業外収益	3,439	2,632	1,720	2,833	2,255
営業外費用	1,321	1,258	3,203	1,770	2,035
経常利益	17,876	16,384	9,758	10,444	14,223
特別利益	1,011	1,299	214	380	11,926
特別損失	8,500	2,412	3,666	3,449	3,925
税金等調整前当期純利益	10,387	15,271	6,306	7,375	22,225
法人税等合計	1,002	5,293	3,610	3,309	7,102
少数株主損益調整前当期純利益 (当期純利益2015年3月以降)	9,385	9,978	2,695	4,065	15,123
少数株主利益 (非支配株主に帰属する 当期純利益　2015年3月以降)	84	377	125	133	75
当期純利益 (親会社株主に帰属する 当期純利益　2015年3月以降)	9,301	9,600	2,569	3,931	15,047

表 6

雪印メグミルク株式会社

連結キャッシュ・フロー計算書

［単位：百万円］

連結キャッシュフロー計算書	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
営業活動によるCF	25,340	23,761	15,266	11,241	26,433
投資活動によるCF	-10,528	-26,543	-35,724	-27,617	4,567
フリーキャッシュフロー	14,812	-2,782	-20,458	-16,376	31,000
財務活動によるCF	-10,383	-4,869	20,047	14,854	-25,332
現金及び現金同等物の換算差額	-48	116	38	134	-59
現金及び現金同等物の純増加額	4,379	-7,535	-372	-1,387	5,609
現金及び現金同等物の期首残高	14,065	18,444	10,917	10,570	9,188
現金及び現金同等物の期末残高	18,444	10,917	10,570	9,188	14,797

表 7

雪印メグミルク株式会社
財務分析表

財務分析表	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
収益性分析					
ROE(自己資本純利益率)	9.6%	9.1%	2.2%	3.4%	12.5%
売上高純利益率	1.8%	1.8%	0.5%	0.7%	2.6%
自己資本回転率	5.26	4.96	4.75	4.81	4.82
ROA(総資本事業利益率)	5.6%	5.2%	3.8%	3.1%	4.3%
売上高事業利益率	3.2%	3.0%	2.2%	1.9%	2.6%
総資本回転率	1.75	1.75	1.74	1.64	1.67
売上高販管費率	23.1%	22.6%	21.9%	20.9%	20.7%
売上高営業利益率	3.1%	2.9%	2.1%	1.7%	2.4%
長期運用安定性分析					
固定比率	180.2%	157.9%	164.7%	183.6%	177.8%
固定長期適合率	94.7%	93.3%	105.8%	103.0%	99.2%
長期的支払能力分析					
負債比率	199.6%	180.8%	171.7%	191.0%	186.3%
短期的支払能力分析					
流動比率	110.9%	111.7%	93.8%	97.0%	103.1%
当座比率	65.7%	70.1%	57.4%	57.6%	58.5%

表 8

上記と同様に次は雪印メグミルクの情報について簡単に読み取っていく。雪印メグミルクは、2009 年 10 月に雪印乳業株式会社と日本ミルクコミュニティ株式会社が経営統合したことにより、2011 年 4 月に設立された。そこで雪印メグミルクの損益計算書を見てみると、2010 年から 2011 年にかけて売上高が大幅に増加している(2010 年の売上高：393,373)。これは日本ミルクコミュニティが手掛けていた牛乳・飲料部門が影響している。

また、明治ホールディングス同様、消費者の健康志向のニーズに合わせた、糖類・脂肪分ゼロの「雪印コーヒー」などが好評で売上を増加させた。そして、乳飲料・ヨーグルト・デザート・ナチュラルチーズを対象とする 4 つのカテゴリーで「カテゴリーNo.1 戦略を実施し、それぞれのラインナップを強化して更なる成長を遂げた。

３　企業分析と経営比較

ここからは明治ホールディングスと雪印メグミルクの２社を、上に記した、貸借対照表・連結損益計算書・キャッシュ・フロー計算書・財務分析表を使ってさらに企業分析し、経営比較を行なっていく。

３.１　収益性分析

収益性とは、企業がどれだけ利益を生み出す能力があるかを意味する。ここからは、総資本事業利益率(ROA)、自己資本当期純利益率(ROE)を用いてグラフィカルに収益性を測定したいと思う。

３.１.１　総資本事業利益率(ROA)　（事業利益/総資本×100）

まず総資本事業利益率からみていく。

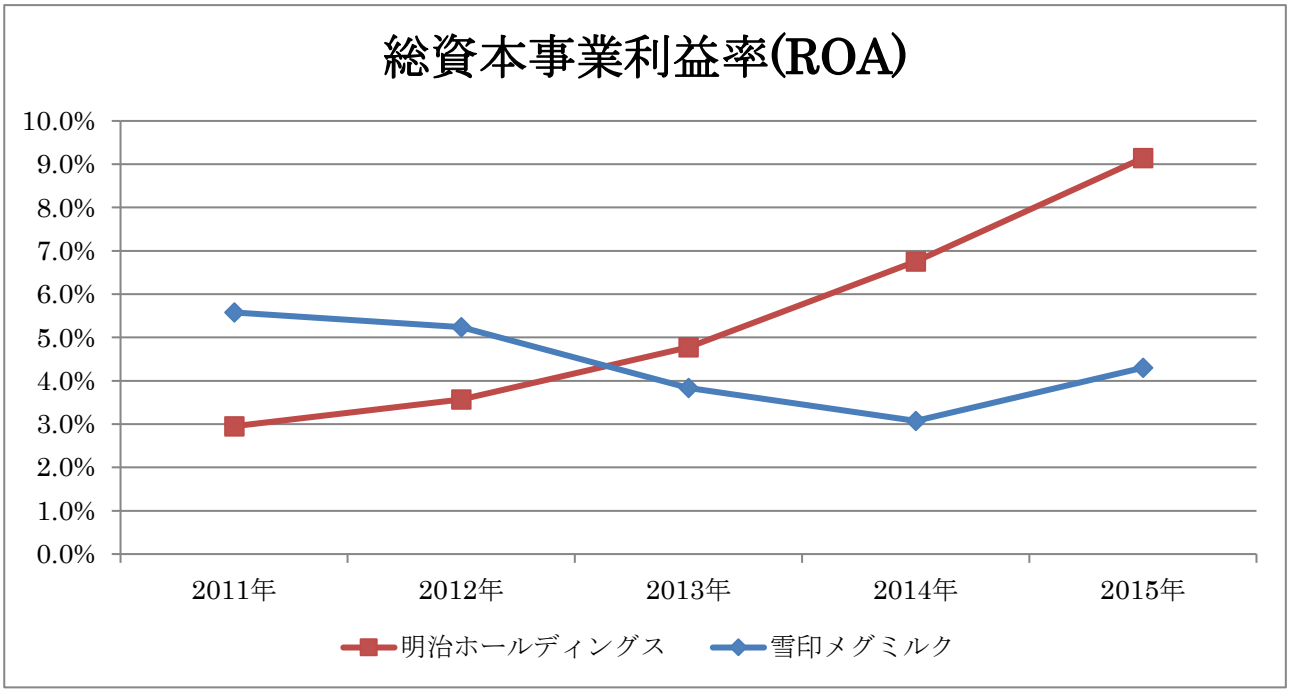

図１　総資本事業利益率(ROA)の推移

図１の総資本事業利益率で企業の経営の立場から、使用資本全体の収益性を分析していく。2011 年から 2012 年の時点においては雪印メグミルクが明治ホールディングスを上回っているが、その後雪印メグミルクは緩やかではあるが減少しており、明治ホールディングスは大きく利益率を伸ばし、2015 年には雪印メグミルクに大きな差をつけた。

次にこの ROA を構成している総資本と事業利益を見ていき、ROA の変動理由について探っていく。

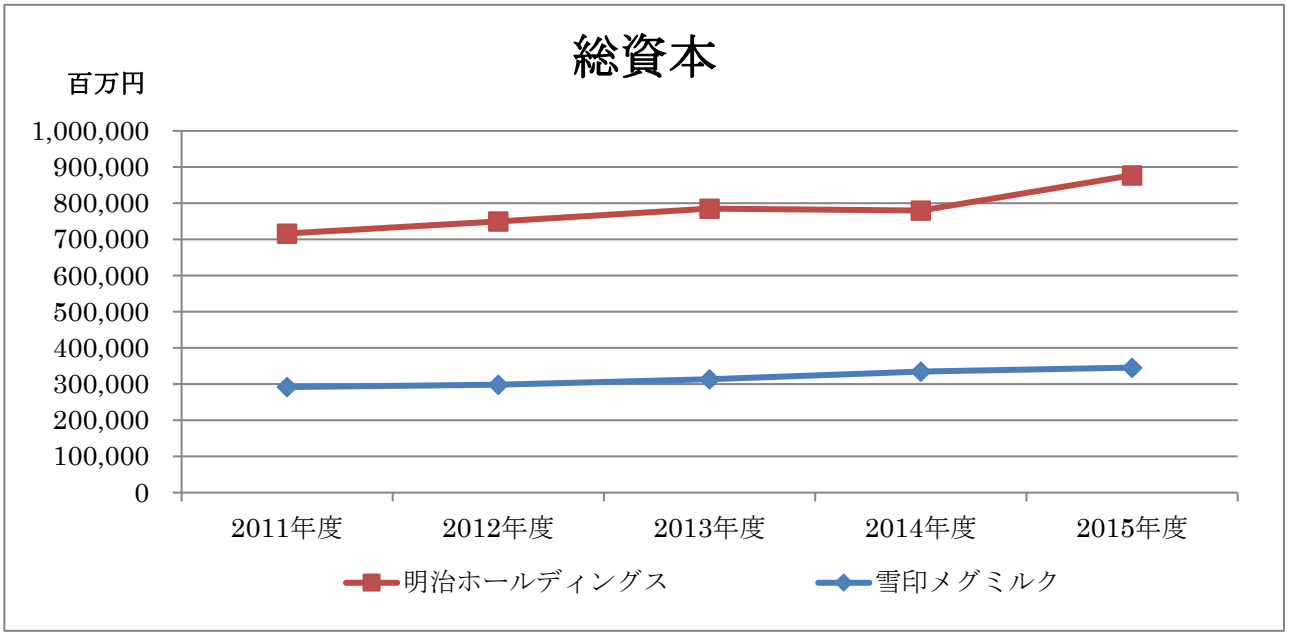

図 2　総資本の推移

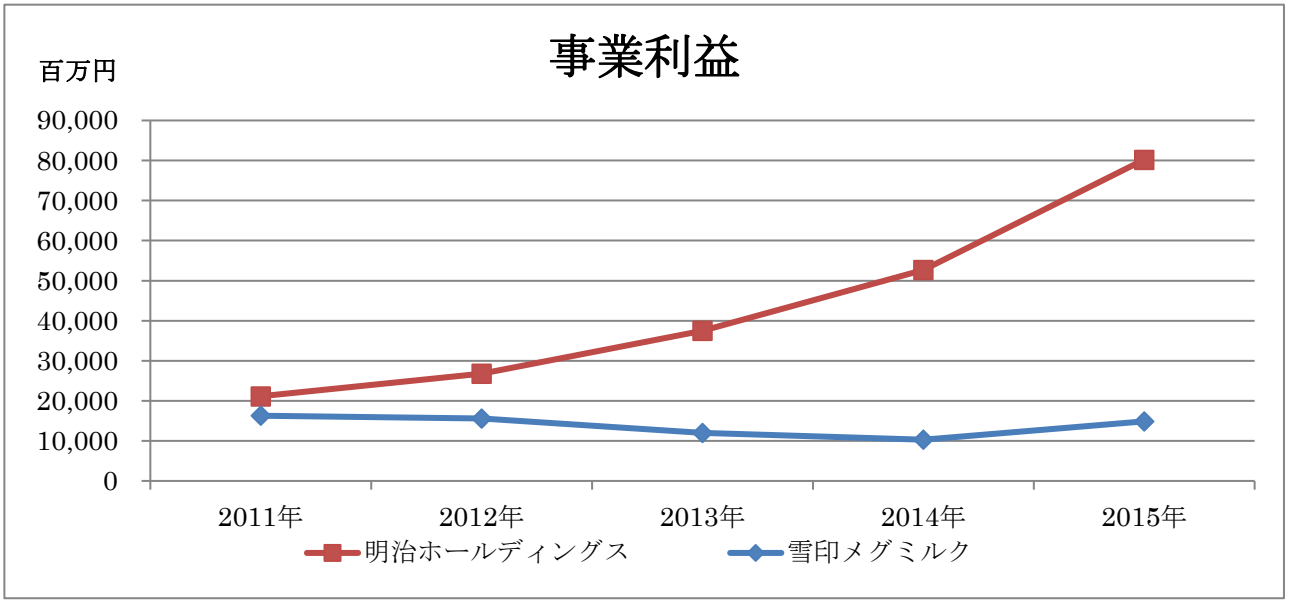

図 3　事業利益の推移

図 2 より総資本においては明治ホールディングスが高い水準で安定していることが分かる。一方の雪印メグミルクも、明治ホールディングスには及ばないものの、一定の水準で安定している。次に図 3 の事業利益を見てみると、明治ホールディングスは 2012 年あたりから大きく増加している。一方で雪印メグミルクは 150 億円前後で安定した水準を保っている。ここで、総資本は両社とも安定的な水準を保っており、事業利益では明治ホールディングスの水準が大きく変動していることから、事業利益が ROA の変動に強い影響を及ぼしていることが分かる。よって明治ホールディングスの ROA の増加は事業利益の増加によるものであるといえる。

３．１．２　自己資本純利益率(ROE)（当期純利益/自己資本×100）

次に自己資本純利益率で、株主の立場から投下資本の収益性を見ていく。

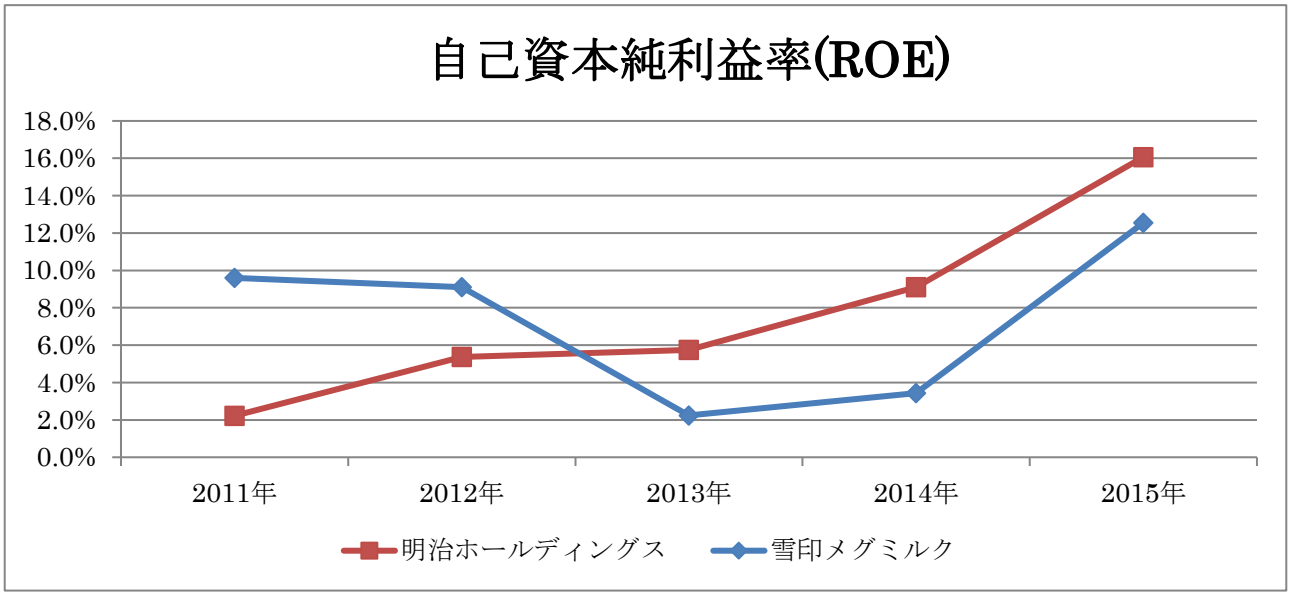

図４　自己資本純利益率の推移

明治ホールディングスは ROE と同様に徐々に増加している。一方の雪印メグミルクは 2012 年から 2013 年にかけて大幅に減少し、その後再び大きく増加している。両社とも 2014 年までは 10%以下が続いていたが、2015 年には 10%を超えている。

次に ROE を構成している当期純利益と自己資本についてみていき、ROE の変動理由について掘り下げていく。

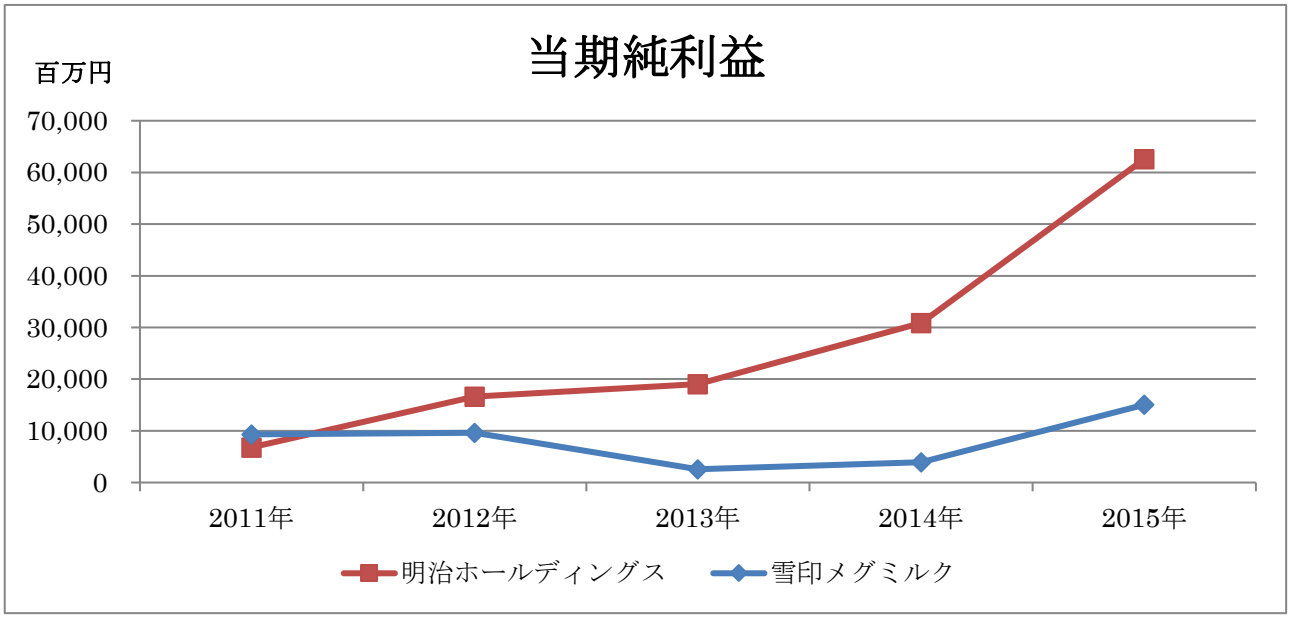

図５　当期純利益の推移

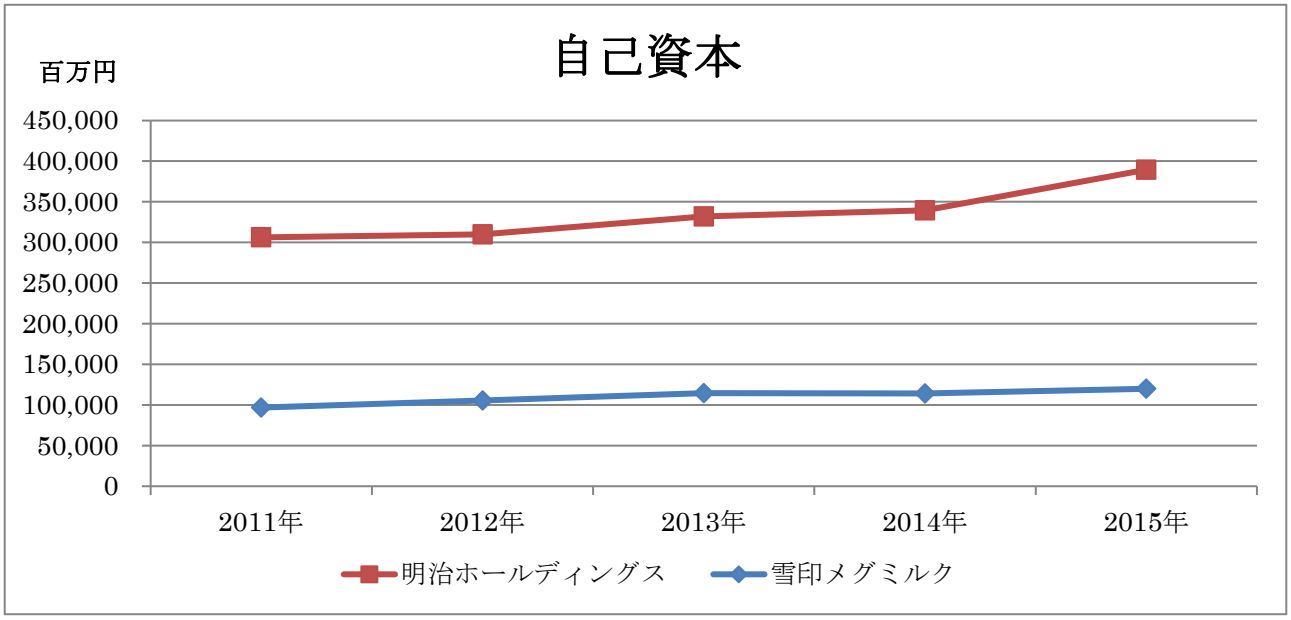

図 6　自己資本の推移

図 5 を見ると、当期純利益が、明治ホールディングスは 2011 年から 2014 年にかけて緩やかに増加し、さらに 2014 年から 2015 年にかけて大幅に増加しているのが読み取れる。2014 年から 2015 年の明治ホールディングスの事業内容は、関西栄養食工業の操業を開始したり、明治メイバランス Mini カップという体に必要な栄養が一度にとれる飲料を発売した。健康志向の消費者が増えていることから、この商品はブランド別累計販売金額で売上 No.1 を勝ち取った。他にも明治ザ・チョコレートを発売。明治にはショコラアドバイザーという社内資格制度があり、明治社員がチョコレートの知識を体系的に学ぶことで、チョコレートホルダーに対して自信をもって勧めたり、説明できるように目指している。これは明治ホールディングスのチョコレートの売上増加に繋がっていると考えられる。また、明治しろのひとときというミルクコーヒーの発売、愛知工場の操業が開始されたことなどが 2014 年から 2015 年の利益増加につながる事業内容である。一方の雪印メグミルクは 2012 年に少し減少しているものの、翌年からは安定的に緩やかな増加傾向にある。

また、図 6 を見ると、自己資本が、明治ホールディングスの方が圧倒的に数字は大きいが、両社とも安定的で緩やかな増加傾向にある。

３.１.３　売上高販管費率と売上高営業利益率

売上を上げるために各種の販売促進策がとられるが、それは販管費の増大をもたらす。販管費の増大に見合う売上の増加が得られているかという視点からまずは売上高販管費率(販売費及び一般管理費/売上高×100)をチェックし販管費の管理を検討する。

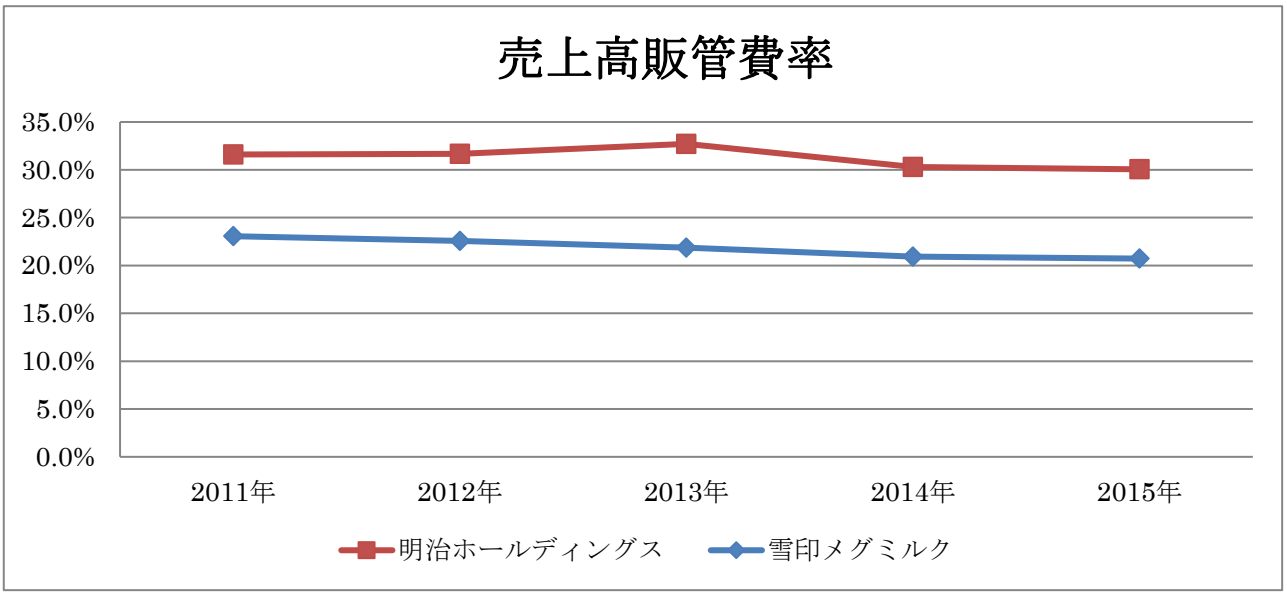

図７　売上高販管費率の推移

図７を見ると、明治ホールディングスは雪印メグミルクを大幅に上回っており、雪印メグミルクの数字が少なく感じるが、２社とも全産業の業績平均(17.4%)を上回っている。売上高販管費率が高いことは、売上高を上げるために販管費に多くの資金を投下しているということである。しかし高いから一概に悪いとは言えない。高い売上高総利益率に結びついているかのチェックが必要となるため、続いて、売上高総利益率（売上高総利益/売上高×100）の推移についてみていく。

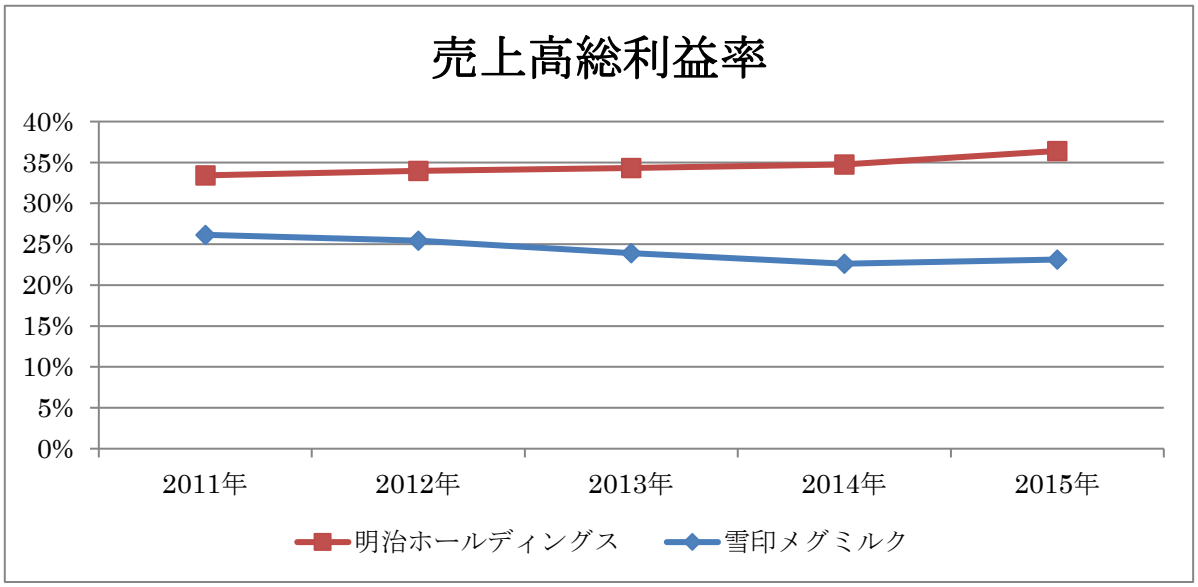

図８　売上高総利益率の推移

売上高総利益率の全産業の業界平均は 22.2%で、図 8 で示されるように、両社とも平均を上回っている。また、売上高販管費率が高く、売上高を上げるために販管費に多くの資金を投下しているということであったが、図 8 から、それに伴う売上高総利益率が出ているため、両社とも安定的な水準を満たしているといえる。

次に売上高営業利益率（営業利益/売上高×100）についても見ていく。

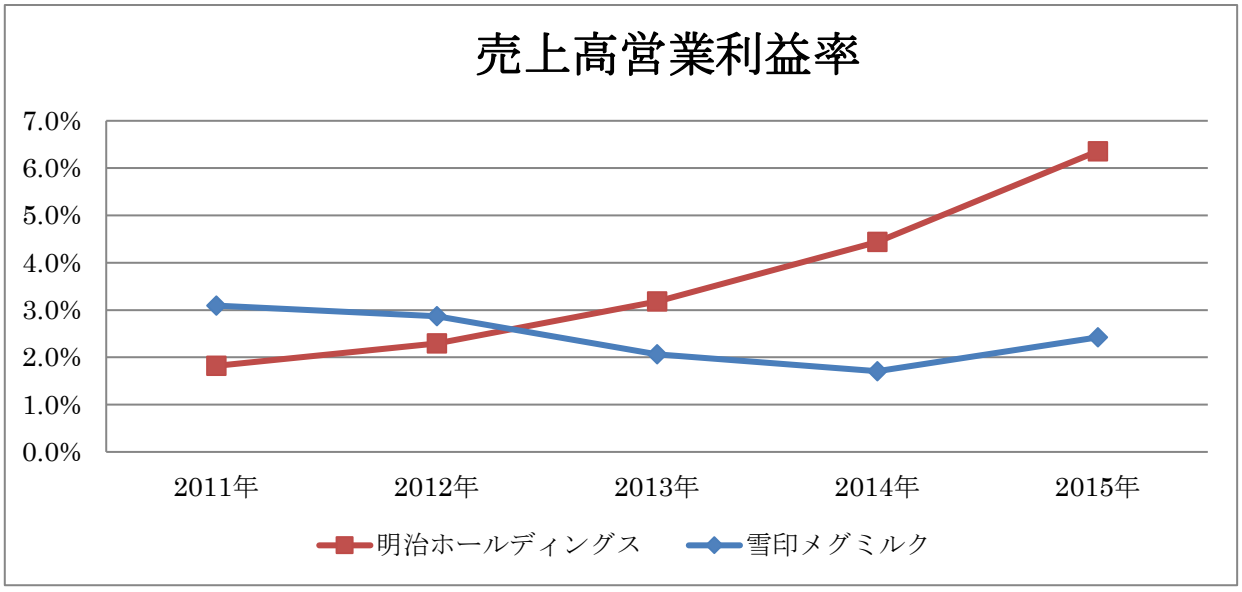

図 9　売上高営業利益率の推移

営業利益は営業活動から生じた利益であり、この比率は本業の収益性が高いかどうかを示すものである。高ければ高いほど本業の収益性が高く、低ければ本業の収益性が低いことを表す。図 9 を見てみると 2012 年までは雪印メグミルクが明治ホールディングスを上回っていたが、2013 年から明治ホールディングスがものすごい勢いで追い上げ、大きな収益生み出していることが分かる。これは 2011 年に明治グループ内事業再編により、食品事業会社「株式会社明治」、薬品事業会社「Meiji Seika　ファルマ株式会社」が発足されたことや、あらたなジェネリック薬品の発売が影響していると考える。

３.２　キャッシュ・フロー分析

両社の資金調達活動と投資活動の状況を把握するために連結キャッシュ・フロー計算書の分析を行なう。表３(4 ページ)と表７(7 ページ)はそれぞれ、明治ホールディングスと雪印メグミルクの、2011 年から 2015 年の連結キャッシュ・フローの一部を抜粋したものである。

✧　営業活動におけるキャッシュ・フロー

まず営業活動におけるキャッシュ・フローを見ていく。営業活動におけるキャッシュ・フローとは企業が本来の営業活動(本業)からどれだけの現金創出能力を有しているかを判断するものである。営業キャッシュ・フローがマイナスの企業は現金が不足するリスクがあり、借金などに奔走しなければならず、本来の営業活動がおろそかになる可能性がある。

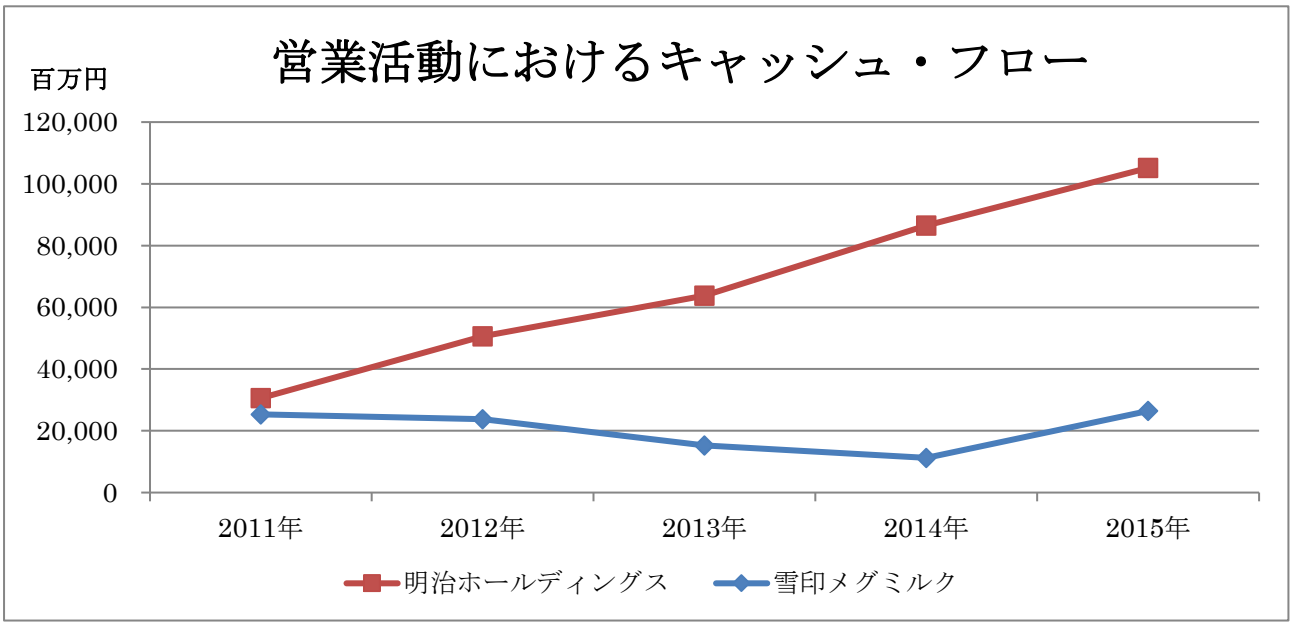

図 10　営業活動におけるキャッシュ・フローの推移

明治ホールディングス営業活動におけるキャッシュ・フローは増加傾向にあり、雪印メグミルクは安定的な水準を保っており、大きな変動はない。

✧　投資活動におけるキャッシュ・フロー

投資活動によるキャッシュ・フローとは、設備投資や、余剰資金の運用によるお金の増減を表す。

図 11 を見ると、双方ともマイナスである。明治ホールディングスは 2014 年に大きな投資が行われていることが分かる。これは関西栄養食工場と愛知工場の操業を開始したことや、メイバランスカップやザ・チョコレート、白のひとときなどの生産を目的に製造設備を増やしたことなどが理由に挙げられる。一方の雪印メグミルクは、2015 年にプラスとなっている。EDINET を参照したところによると、有形および無形固定資産の売却による収入が前年に比べて大きく増加していることから、これがプラスとなった理由であると考える。

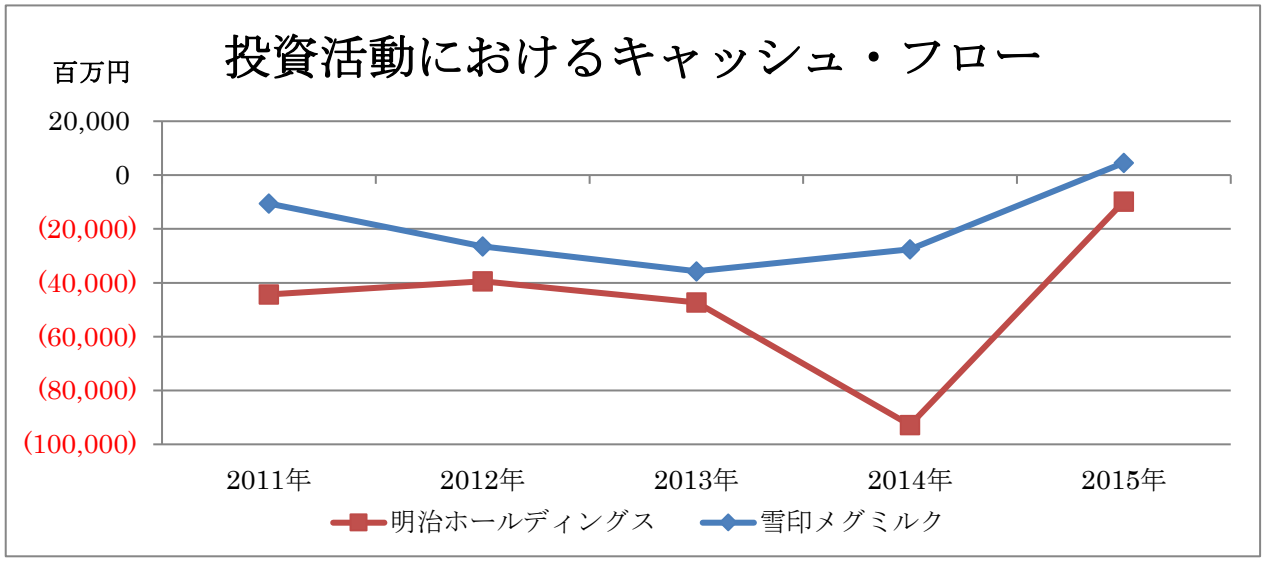

図 11　投資活動におけるキャッシュ・フロー

✧　財務活動におけるキャッシュ・フロー

最後に財務活動におけるキャッシュ・フローについてみていく。財務活動におけるキャッシュ・フローとは、営業活動および投資活動を維持するために資金をどのように調達して、返済したかを示す情報の事である。図 12 によると、明治ホールディングスは 2014 年から 2015 年にかけて支出が大幅に増えており、これは短期借入金の純減少やコマーシャル・ペーパーの減少、社債の償還による支出の増加が要因となっている。

雪印メグミルクが 2013 年に支出が減っているのは、EDINET によると、短期借入金の純増加額や長期借入による収入の増加などが要因となっている。また、2015 年に支出が増えている原因は短期借入金の純減少額や長期借入金の返済による支出の増加などが挙げられる。

キャッシュ・フローの比較をすると、両社とも投資活動、財務活動におけるマイナスを営業活動でまかなえている部分とまかなえていない分が半々くらいの割合で存在している。全体を通してみると、雪印メグミルクよりも明治ホールディングスの方が積極的に投資を行なっているといえる。

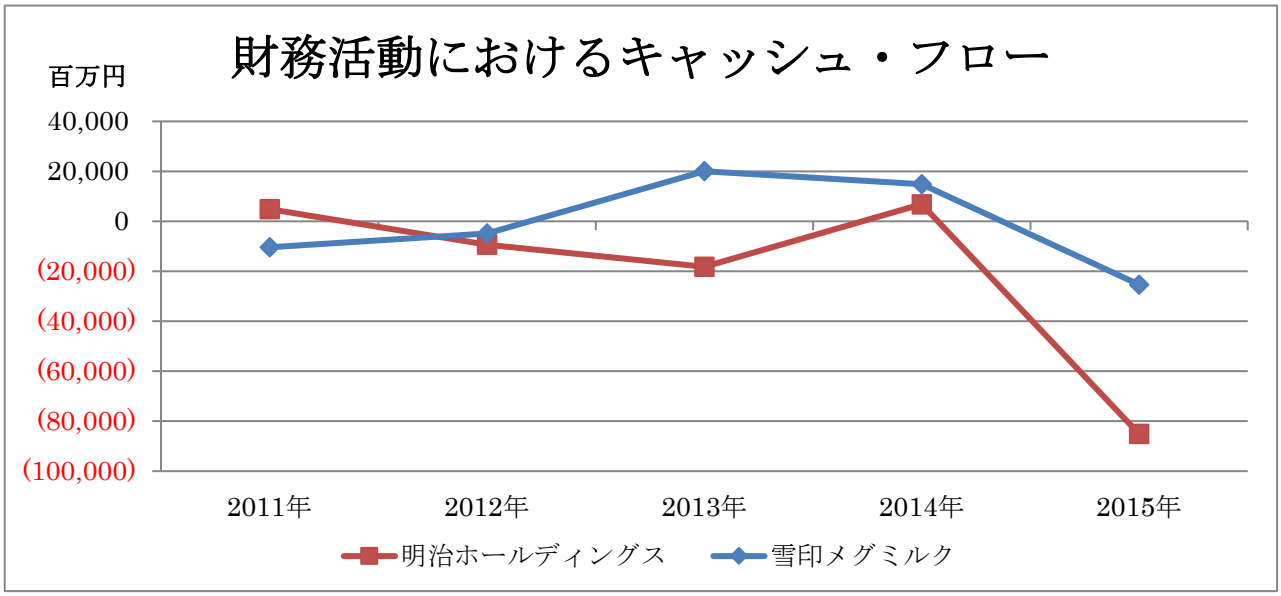

図 12　財務活動におけるキャッシュ・フロー

３.３　財政状態分析

企業が債務に対してどのくらいの弁済能力をもっているかを支払能力という。支払能力の分析は特に関心を持つ債権者の立場から重要である。短期的支払能力を測定する指標として、流動比率・当座比率の２つを用いて分析を行なう。

✧　流動比率

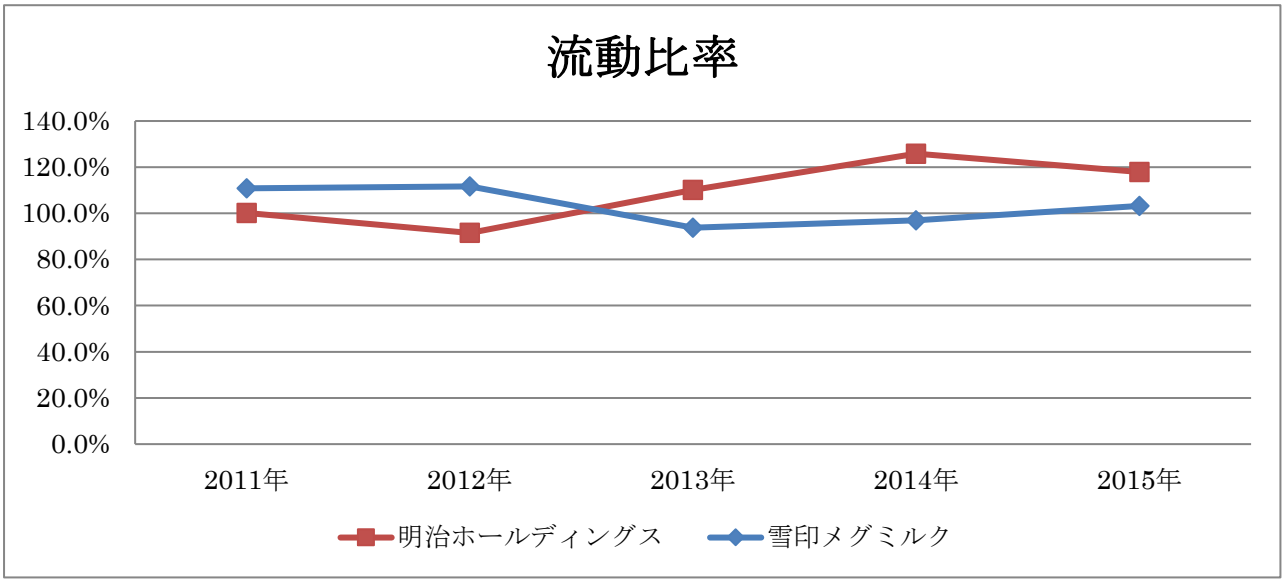

図 13　流動比率の推移

図 13 の流動比率は流動資産に対する流動負債の割合であり、200%程度であれば安全と言われている。両社ともそこまで大きな変動はなく、明治ホールディングスは 100%~120%あたりを、雪印メグミルクは 100%前後程度の割合で推移している。

✧　当座比率

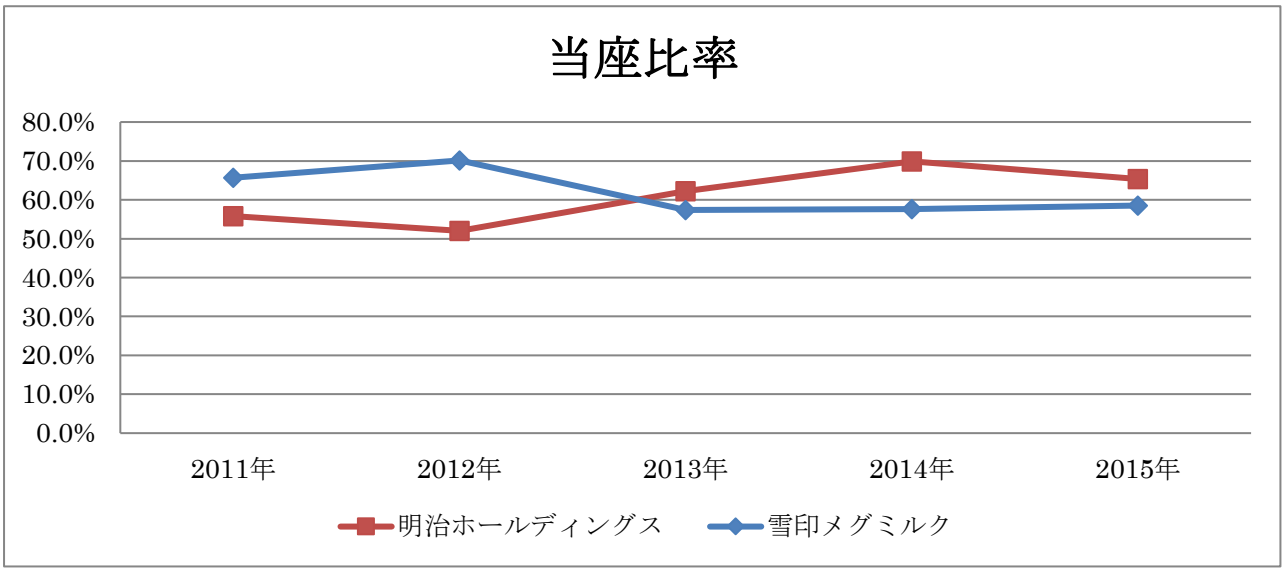

図 14　当座比率の推移

当座比率は流動資産のうちすぐに現金化できる資産である当座資産と流動負債の比率である。当座資産が流動負債より大きければ短期の支払い能力には何の問題もないといえる。当座比率が 100%程度であれば短期的支払能力には問題がなく望ましい割合であると言われている。図を見ると、両社とも 100%を超えておらず、明治ホールディングスは増加傾向、雪印メグミルクは減少傾向にある。

次に固定資産に対する資金の長期運用の安定性を表す固定長期適合率についてみていく。

✧　固定長期適合率

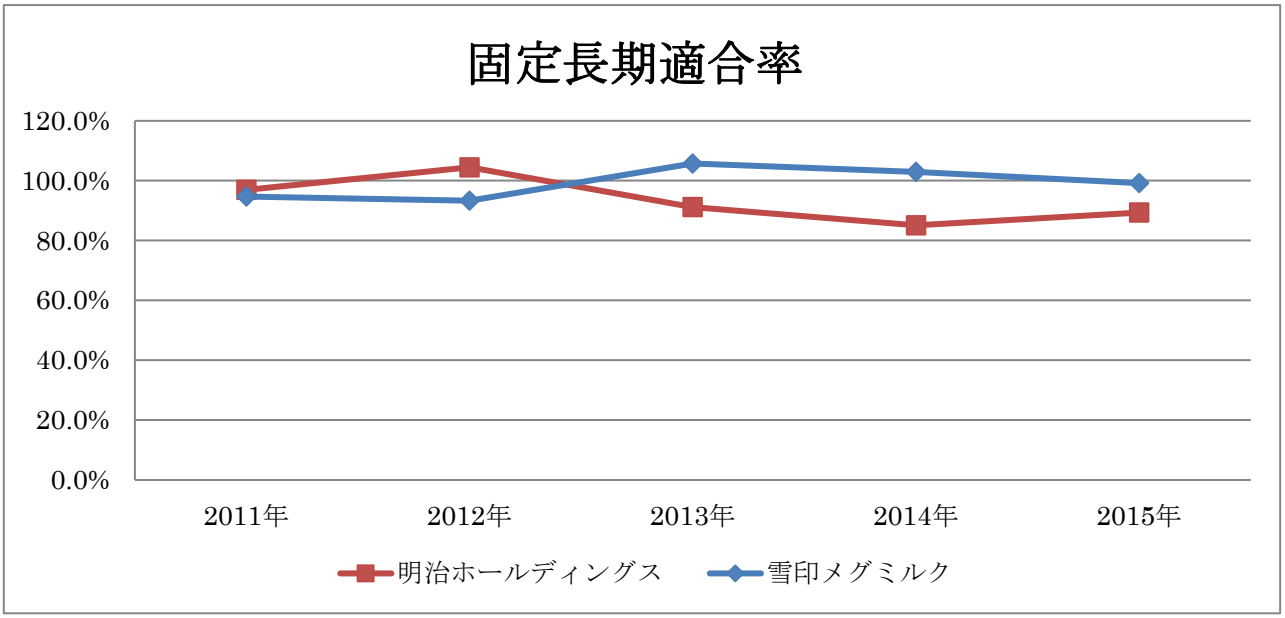

図 15　固定長期適合率の推移

図 15 は固定長期適合率（固定資産/（純資産+固定負債))×100 である。この比率は 100%以下であることが望ましいとされている。明治ホールディングスは 2013 年から安定的に 100%以下で推移している。一方の雪印メグミルクは一時 100%以下になるが、2013 年から再び 100%を上回っている。

4　おわりに

最後にこれまでの分析をまとめる。収益性に関しては明治ホールディングスが優れている。安全性分析に関しては、大きな差はないが、比較的明治ホールディングスが優れているといえるだろう。雪印メグミルクは全体的にみると明治ホールディングスとは規模が少し小さくなってしまうが、どの項目に関してもそれほど大きな変動はなく、安定的な水準を保っている企業であることが分かった。分析の結果、総合的には明治ホールディングスが優れているといえる。しかし、雪印メグミルクは明治ホールディングスよりも積極的に設備投資などを行なっており、将来性を期待できる。

現在の日本は少しずつ景気回復傾向に向きつつあり、食品業界は人々の生活に密着しておりなくなることはないため安定しているとは言えども、消費低迷や製造コストの増加など、不安要素はなくなることはない。厳しい生存競争のなかで生き残るために、各企業がどのような戦略を立て、行動していくのか、今後の展開に注目したい。

参考文献

・明治ホールディングス株式会社 HP
http://www.meiji.com/

・雪印メグミルク株式会社 HP
http://www.meg-snow.com/

・日本経済新聞 HP
http://www.nikkei.com/news/category/

・EDINET
http://disclosure.edinet-fsa.go.jp/